

Newsletter

1

January 1, 2008

北海道大学大学院文学研究科・教育学研究院・経済学研究科
カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センター

CONTENTS

心の社会性
—いま、なぜ?

活動報告・お知らせ

●リーダー挨拶

「心の社会性に関する
教育研究拠点」発足!北海道大学大学院
文学研究科教授

山岸 俊 男

2002年の秋に発足した21世紀COEプログラム「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」は、4年半にわたり拠点内外の多くの方々の協力を得て、大きな成果をあげることができました。その成果は、日本学術振興会の審査委員会から、「設定された目的は十分に達成され、期待以上の成果があった」という事後評価をいただき、また事後評価の中で「拠点形成の組織的・戦略的なシステムのモデル的なプログラムの事例」としてとりあげられています。

このような21世紀COEプログラムの成果を更に発展させ、一層の教育と研究の発展をはかるために、21世紀COEのメンバーを中心に、新たに経済学と倫理学からのメンバーを加えるかたちで計画したグローバルCOEプログラム「心の社会性に関する教育研究拠点」がこのたび採択され、2007年6月から新たな活動を開始することになりました。

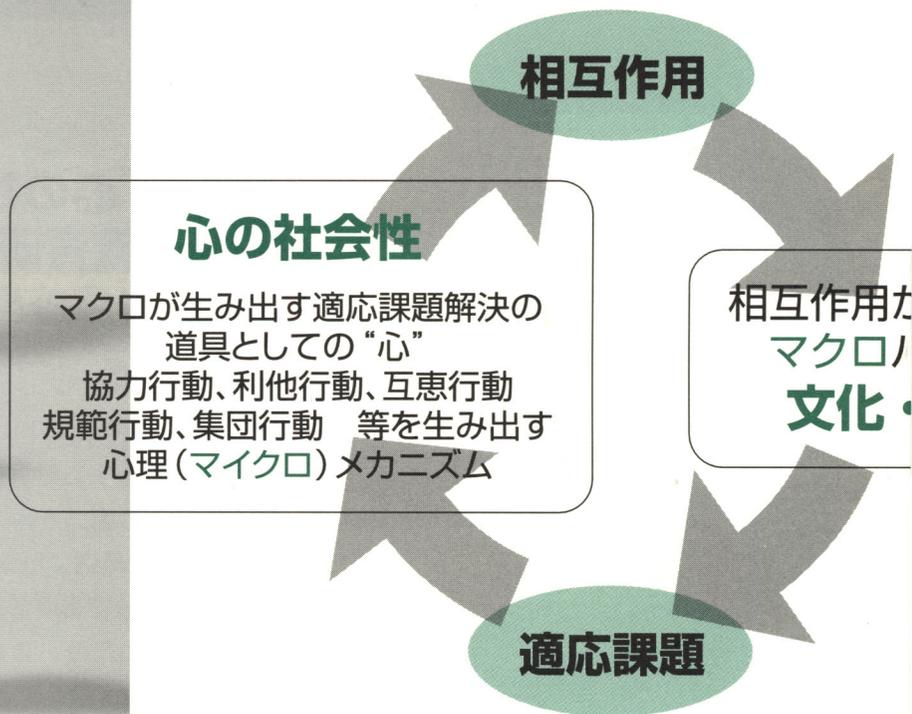
新たに発足したグローバルCOEプログラム「心の社会性に関する教育研究拠点」は、一方では、21世紀COEプログラムの研究成果を基盤として学内共同教育研究施設として設立された「社会科学実験研究センター」を中心に、経済学や政治学など社会科学の諸分野との協働を推進すると同時に、もう一方では、進化心理学研究の世界的中心として知られているカリフォルニア大学サンタバーバラ校「進化心理学センター」との連携を通して、研究のみではなく、若手研究者の育成における国際化の一層の推進をめざしています。

今後4年半、事業推進担当者を中心として、研究と教育の両面にバランスのとれた活動を進めたいと願っています。皆様方からの温かい御支援、御協力をたまわりますようお願い申し上げます。



心の社会性

——いま、なぜ？



「心の社会性」は、20世紀の社会科学の中心的なドグマのひとつでした。つまり、生物種としてのヒトは、社会化のプロセスを経て文化や価値、あるいは規範を内面化することによりはじめて社会的存在としての「人間」になるのだという基本的な理解が、心理学だけではなく、社会学、政治学、人類学、経済学など社会科学の様々な分野で共通の大前提として受け入れられてきたのです。私たち人間は、両親や家族、まわりの人たち、友人、学校、職場、地域共同体などの相互作用を通して、そういった人たちが持っている価値や規範を自分のものとして取り入れ、社会的な存在になっていくという考え方です。

「心の社会性」を、このような、文化や価値や規範が内面化されることで人々の心が形成されるとする考え方として捉えるのであれば、私たちのグローバルCOE拠点がめざしているものは、今までに様々な分野で研究しつくされた、何の新鮮さもない研究テーマであるように思えるかもしれません。私たちがめざしているのは、そんな古臭いテーマについての研

究と教育なのでしょうか。

私たちは、そうは思っていません。私たちのグローバルCOE拠点の目的は、従来の「社会化」や「内面化」といったプロセスとは全く違った視点から「心の社会性」を解明することにあるからです。その背後にあるのは、人間の「心の社会性」を理解するためには、従来の考え方からは決して捉えきれない、次の二つの側面へのアプローチが不可欠だとの考え方です。

まず第一に、私たちは「心」を環境に対する適応のための道具であるとする、適応論的な視点から心を理解するアプローチをとっています。

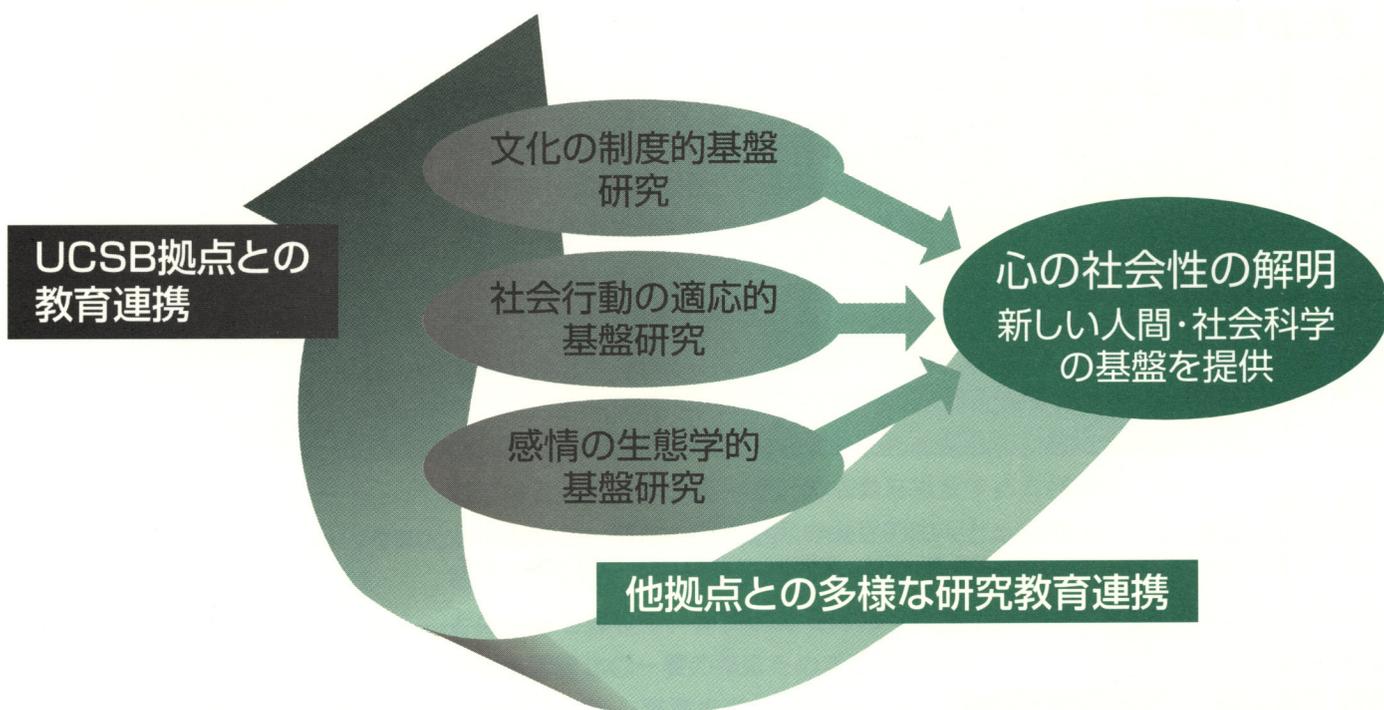
このアプローチからすれば、「心の社会性」とは、社会的環境の複雑さ—他の人間の戦略的な振る舞いを含む動的な特徴—にその基盤をもつはずで、すべての道具のデザインが、その道具を使って果たす作業の内容によって定まってくる—例えば、板を切るという作業がのこぎりの形態を定め、釘を打つという作業が金づちの形態を定める—のと同様に、心を使っ

て解くべき課題の複雑で動的な性質—すなわち「社会環境への適応」—が、心を本質的に社会的存在にしているという理解が、わたしたちのアプローチの根底にあります。

次に重要なのは、人間が心を使って解くべき課題そのもの、すなわち他の人たちの反応や行動によって構成されている社会環境それ自体が、実は人間の心の動きによって作り出された結果だという意味での「心の社会性」です。つまり、心は社会環境を作り出し、維持し、変化させるという意味での「心の社会性」です。この意味での「心の社会性」は、私たち人間が、私たちの行動と独立に存在する、外から与えられたものとしての社会環境に直面しているわけではなく、社会環境の複雑な性質そのものを自分たちで作り出し維持しているのだという点を強調するものです。

このように、私たちのグローバルCOEが最も重要だと考えているのは、私たち人間の心が、環境への適応の道具であると同時に、社会環境を作り出す道具でもあるという二重の意味での「社会性」を本質的に備えているという点です。こうした「心の社会性」の解明こそが、人間の心の外部にある、いわば外から与えられたものとしての文化的価値や社会規範を内面化するという受動的な「社会性」を超え、社会を能動的に作る動物として人間を理解する私たちのグローバルCOE拠点がめざすものです。

が生み出す
パターン
制度



活動報告

第1回 国際ワークショップ (北海道大学社会科学実験研究センターとの共催)



第1回国際ワークショップでは、Victoria Yeung博士を招き、ステレオタイプの維持過程と文化のダイナミクスに関わる研究を紹介していただいた。ある社会集団のステレオタイプ情報がどのように参加者間で伝播されていくかを検討したところ、European-Australianではステレオタイプに合致しない情報が伝播されやすかったのに対して、Asian-Australianでは、ステレオタイプに合致した情報が伝播されやすいことが示された。

日時：2007年10月18日(木)
場所：北海道大学大学院文学研究科
発表者：Victoria Yeung (University of Melbourne)
参加者：山岸 俊男 (北海道大学)、亀田 達也 (北海道大学)
結城 雅樹 (北海道大学)、高橋 伸幸 (北海道大学)
大沼 進 (北海道大学)、石井 敬子 (北海道大学)
他、約16名

第2回 国際ワークショップ (大学院改革プログラム「人文科学における実証的研究者の育成拠点」との共催)

第2回国際ワークショップでは、Sandra E. Trehub博士を招き、乳幼児の音楽知覚と反応に関する研究を紹介していただいた。乳幼児は、音楽に非常に重要な要素であるpitchやtimingの関係を大人と同様に知覚可能であり、異国の音楽(子守唄)では大人よりも上手にそれらの学習が可能であることが示された。さらに、複雑拍子と単純拍子の知覚能力に関して、文化差が存在する可能性も示された。



日時：2007年11月12日(月)
場所：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W309
発表者：Sandra E. Trehub (University of Toronto)
参加者：安達真由美 (北海道大学)、陳 省仁 (北海道大学)
武田 知明 (北海道大学)、森本 琢 (北海道大学)
石井 敬子 (北海道大学) 他、約16名

第3回 国際ワークショップ (特定領域研究「実験社会科学」との共催)



特定領域研究「実験社会科学」の計画研究「社会行動の文化・制度的基盤」(班長：山岸俊男)の主要研究テーマは、認知・信念システムの文化差や社会行動の制度的基盤を比較文化・比較社会研究を通して明らかにしていくことにある。本ワークショップでは、こうした研究を実施するにあたり、海外共同研究者との間でどのような協働研究体制が可能なのかについて議論された。

日時：2007年11月19日(月)
場所：Harbour Plaza Hong Kong (香港)
参加者：James Liu (Victoria University of Wellington)
Uichol Kim (Inha University)
Yicheng Lin (National Taiwan University)
Chinlan Huang (National Taiwan University of Science and Technology), Feixue Wang (Sun Yat-Sen University)
Jianxin Zhang (Chinese Academy of Sciences)
山岸 俊男 (北海道大学)、内田由紀子 (甲子園大学)
石井 敬子 (北海道大学)

お知らせ

2008年2月23日～24日、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (UCSB) にて、UCSB 進化心理学センターとの共催の国際シンポジウムを開催する予定です。その内容につきましては、次号のニュースレターで紹介いたします。

グローバルCOE

心の社会性に関する教育研究拠点

The Center for the Sociality of Mind